Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-06-28

案外堂主人小室信介の政治小説 : 「自由艶舌女文章」を中心に

長澤, 漣

(Citation)
国文神戸,創刊号:30-38

(Issue Date)
1968-06

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100481933

案外堂主人小室信介の政治小説

―「自由艶舌女文章」を中心に―

長澤　漣

一

「自由艶舌女文章」の作者である案外堂主人小室信介についてはすでに柳田泉氏が「政治小説研究上（昭和十年・春秋社）」に詳しい考証をされている。その全生涯と政治小説について、これ以上の考証は不可能といわれるぐらい詳細なものである。さらに林基氏は「東洋民権百家伝（岩波文庫）」の解題において、伝記的な新事実や、農民問題（一揆）上の信介の生涯について明らかにされている。「自由艶舌女文章」のみについての論はまだ管見に入っていない。ただ「明治文学全集（筑摩書房）」における柳田氏の解題と「明治文化全集（日本評論社）」の石川巌氏の解題によってほぼその輪郭を知ることができる。一方、越智治雄氏は「政治小説と草双紙――小室案外堂の場合――」（「国語と国文学」昭和三十年十月）において政治小説と草双紙を結ぶものとして信介をあげ、文体論的考察によって彼の政治小説を解明されている。

以上が信介に関する論評のすべてであると思うが、「自由艶舌女文章」に限って言えばすべて断片的にとりあげたものであり、全体的な追求は今後に残された問題であるといってよい。

本論では上記各氏の論に沿いながら、いくらかの見解をのべてみたい。

二、刊行本について

舞鶴市立西図書館に「糸井文庫」①なるものがあり、そこに小室信介に関する資料が若干蔵されている。それに基づいて「自由艶舌女文章」の刊行本についてふれてみたい。これが最初に書かれたのは「自由燈」②紙上である。「自由燈」の創刊号（明治十七年五月十一日）から五十八号（同年七月二十三日）まで四十七回にわたり連載された。

ついで初版本をみると、前後編二冊に分冊され発刊されている。発行年月日奥書等はみられない。表紙に案外堂主人稿、胡蝶園若菜序、自由艶舌女文章と記されている。見返しに斎藤家壽家編、案外堂主人稿、大蘇芳年画、発行所自由燈出版局とある。後編には題名

見返し等なし。本文に先だって「蝶胡園主識（あるじしるす）」という文と、信介の「序」が記されている。この「序」は自由燈紙上では「はしがき狂文句（ざれ）」と書かれている。

再版本は全一冊である。奥書に明治十七年七月二十四日出版御届九月発売、十九年九月二十四日再版御届、十九年十月出版、編集兼出版人鯰江家壽家とあるのみで、信介の名はみられない。再版本の奥書から、初版本の発行年月月は十七年九月とわかるが、編者の斎藤家壽家（初版）、鯰江家壽家（再版本）については不明である。出版上の体裁を整える上で、信介自身の変名であるのかもしれない。

再版本には初版本にあった案外堂の名と、自由灯出版局の名が消えているのは注目すべきだろう。その理由として二つの立場が考えられる。一つには当時の出版事情である。明治十六年四月十六日に新聞・出版条例が改正されこの種の出版はすべて届出制となっている。信介は十四年一月「平仮名国会論」を朝日に書き、そのため朝日は一箇月にわたり発停を受け、その後の民権運動の中で、信介の名は警戒されていたことは想像にかたくない③。同じことは彼の著「東洋民権百家伝」においてもみられる。同著初帙三冊は十六年八月二十八日に出ているが、十七年一月に出された第二帙三冊は「東洋義人百家伝」と改題されている。「民権」から「義人」への改題の意味するものは重大である。彼の義人観のくわしくは前記林氏の解題にゆずり再述はしないが、宗五郎的義人を民権家とみる立場④は彼独自のものであった。江戸一揆を背景とする義人の行動と自由民権家の言動と同一線に結びつけようとする信介の意図は「義人」と改題せねばならぬことで、その意義を失ってしまう。しかしこれは出版事情から版権を得るためのカモフラージュであったようだが、これらをみても当時の自由民権派に対する出版事情の厳しさがうかがい知れる。

他の一つの面として、当時の戯作出版界の慣習にもあったと思われる。初版の序文を書いた胡蝶園は若菜貞爾で、仮名垣魯文門下の戯作者である。信介はその他戯作者花笠文京、篠田仙果らとも交友があり⑤若くから戯作文学に親しんだ点からみて、作者をそれほど重要視しない戯作出版一般の方法をとったとも考えられるのである。

ついでに彼の滑稽諧謔的な戯作傾向を示すものとして「冥府狆談」があるので記しておく。これにも本名はなく奥書に、明治十四年八月三日御届、編述人宮崎孝一、出版人松本平吉、発兌人同盟書とあるのみである。

明治以後の出版では前掲「明治文化全集二十一巻」がある。この底本としてカット写真に再版本が示されているが、内容上初版本を採用しているようである。初版本のように前後編の区別をしている。本文を前後編に分けることは、初出の自由灯紙上や、再版本では区別がなく、初版本の単なる印刷上の都合からの区別である点からみて、前後編の区別は必要ないものと思われる。また内容の構成上からみても二十三回で前後編を区切ることは適切でない。

最近では「明治文学全集五」に収められているが、これは既出「明治文化全集」から転載されたものである。（解題にその旨注記あり。）

以上が「自由艶舌女文章」の刊行本のすべてである。本文についてはいずれも変りない。ただ前後編の区別が不要なことと、初版本

の「序」が初出では「はしがき狂文句」となっている点は、信介の文章が戯作の影響下にあったことを考えると、それを示すものとして今後の出版に明記すべきでなかろうか。

二

明治十年代の後半から二十年代前半にかけて数多く輩出した政治小説家たちの中では、小室信介はむしろ群小作家の中に入るであろう。天野龍溪、東海散士、末広鉄腸らの陰に隠れその作品はむしろ類型的で完結性に乏しい。早逝の故もあり、（明治十八年八月三十四才で死去）またその生涯は新聞言論界に中心があったこともあって、その政治小説の数も少ないのであるが、「自由艶舌女文章」は一応唯一の完結した作品である。[6] しかも時代設定が現代であり、中心人物がすべて女性であるという点もこの作品だけで、他の同時期の政治小説の中でも特異な存在である。前記自由灯に連載したものであるから、毎回一応の読み切り的形式をとった回が多く、だいたい毎回約千二、三百字前後、四十七回で完結している小編である。まず構成の概略をのべておく。

第一回から十一回までは抱えの芸妓小民（こたみ）（国民の寓意）をめぐる話である。これをとりまき養母お勘（官権）、金持髯大尽（政府高官）、新貝熊次（改進党の大隈重信）、箱屋の戌吉（警察）が小民を束縛する。十二回から三十五回までは複雑なお信（志士的民権家）の身の上話、お力、お金、智次（力、金、知は自由党星亨の信条という）らの同志を得る。最後の四十七回まではお信らの助力によって小民が自由の身になるという設定である。

ここに描かれた女性群について柳田氏は前記著に次のように記している。

一、全体として人物の不自然さがめだつ。お信らは必ずしも女性でなくてもよいわけだが、女性を主位としたのは彼の工夫で、女権伸張、尊重の意図よりも自由党の宣伝普及という意味で女性利用である。

二、この小説の人物事件を寓意的にしたのは、この頃の政治小説の常として官権の眼を逃れるためと下層階級の読者に訴えるため。

私はここで特に氏のいう「女性利用」の問題をもうすこし追求してみたい。「自由灯」が自由党の宣伝機関紙的性格を持つものであったことからして、下層階級への訴えに女性を用いたことは当然うなずけることだが、信介がこの表現手段をあえて用いた理由は何であろうか。信介の作品群の中で主題を女性に仮託するのはこの作品だけである。その意味で彼にとっては特殊な設定といわねばならない。

一応結論からのべると、この作品が現代におかれ、主題を女性に仮託したのは、彼の単なる思いつきや偶然でなかったのである。

第一の理由として、信介を含めて自由党の立場がそれを必要としていたからである。明治十七年といえばその前半と後半で自由党の方針が大きく変貌する曲り角にあった。十年代の半ばを頂点とする自由民権運動は、改進党の出現や、福島・加波山等一連の事件にみられる弾圧を契機として分裂化していく時期で、この年の十月に自由党は解党している。十七年の前半までは自由党として一応は「国権

は民権に従属する」ものであり、そのため「婦女農民労役大衆」を含む広い民権運動を展開していたのであった。以後は農民層のと連携を断ちむしろ国権伸張海外進出に向ってゆく。「自由艶舌女文章」はちょうどこの前期自由党方針の最後を飾る時期に書かれたものであった。「婦女農民労役大衆」を含む民権運動は自由党のみでなく信介の大きなテーゼであった。特に農民問題は「東洋民権百家伝」で義人＝民権家という独得の意識をあつかっており、婦女大衆の問題も必然であったはずである。

つぎに「自由灯」創刊号の社説「自由灯の光を恋ひて心を述ぶ」（しゅん女）なるものを注目したい。

「女たるもの世の幸なきこと如何にありけん、口惜しきことのかぎりなり、今や世の中の朧げながら開けゆきて古のくらき世ほどにはあらねども、習慣のひさしき女は尚男にくらぶれば其の権利の遙かに其下にありて、所謂奴隷のありさまを免れ得ぬありさまありぬるは遺憾（のこりおし）かる事どもにあらずや、……今度この自由の灯てふ新聞こそ……婦人の権利をも保護し依古偏頗（いこへんぱ）なる理を正して人を導き玉ひ野干玉（ぬばたま）の闇路を迷ひ狐狸妖怪引剝夜盗の類にもひとしき悪者の為めに虐げ苦しまざるる女原の進路をも照して自由の域に進め玉はんこと何の疑ひあるべき……」（十七年五月十一日）

さらに五月十八日号から十回にわたり「同胞姉妹に告ぐ」（しゅん女）というのがある。

「文明自由の国人に対して甚（いた）く愧ぢ入る事のはべるなり……女は下女嫗妾御召使（はしため）と賤しめられ絶えて同等の待遇を受けざるは甚だ遺憾の極ならずや……」（五月十八日号）

しゅん女なる人物はおそらく信介自身か宮崎夢柳でないかと思われる。いずれにしても創刊号の社説から「婦人の権利」を主張することは単なる女性利用の域を越えている。そしてこれらの論とともに「自由艶舌女文章」が連載されたというのも同一目的の意識下にあったことを意味する。

女権伸張の問題は、宮崎夢柳の影響も大きかった。「自由灯」にあって「双玉聯璧」といわれた夢柳は、土佐立志社にあった時、女性民権運動の草分けともいえる岸田俊子（後の湘烟女史）と詩文を交す仲であった⑧。夢柳の政治小説の目的は「政治上の稗史小説」であるとし、「此の政治の善美ならんことを企図し世運の隆盛ならんことを計画する志士仁人等が須く先づ其の所謂下等社会の提醒誘導すべきもの⑨」であるとしている。湘烟女史との交流や「下等社会の提醒誘導」が彼の主論であり、また初期自由党の政治意図でもあった。信介の婦人意識も夢柳のそれと軌を一にし、その形象化が「自由艶舌女文章」となったわけだった。

もう一つ注目すべきは信介のジャーナリスティックな一面である。「自由艶舌女文章」という題名は当時の「美人の舌禍」事件からとっている⑩。新潟県柏崎の西巻咲耶という小学校の先生が、明治十六年政治演説をして集会条例の最初の女犠牲者になったという。世相を鋭敏にとらえ適切なキャッチフレーズとともに彼の信条を表現するのは彼の最も得意とするものであった⑪。

信介が女権伸張の実際運動に参加したという事実はない。また明確なそれらに関する論文も見当らない。従ってどの程度まで（例えば婦人参政権の問題）の伸張を考えていたかは不明である。しかし少くとも封建的桎梏からの女性解放は真剣に考えていたとみるべきであり、またその影響も大きかったといえる。例えば、岸田俊子ら

の影響を受け女子参政を主張した福田英子は、十七年十月上京し、自由灯の記者だった紫欄坂崎斌をたよって「自由灯」社に出入りしている⑫。信介と英子は直接のつながりはなかったにしても、信介らの影響は、女権伸張運動に与えたものが大きいと見るべきであろう。

しかしこれらの影響は一つの結果であって作品自体に何ら女権伸張の具体的問題が描かれていないという疑問は残る。これは作中の人物像がすべて「不自然」であり現実性に欠けるということと関連する。この問題は当時の政治小説全般に共通するものだが、信介において明確な女権伸張に関する基礎理念が示されていないことに原因がありそうである。

ここで「自由演舌女文章」の中で最も力を入れて描写されている浅間のお信についてふれてみたい。梗概の所でみた通りこの作品の約半分はお信の描写に費やされている。そしてお信は勤王志士的自由民権家の寓である。換言すれば信介の考える民権家の一つのパターンを示しているとみてよい。

お信は大塩平八郎の同志人見権平の娘となっている。大塩平八郎を民権家の系列と考えるのは「東洋民権百家伝」の編さん意図と合致する。しかしわざわざこのような設定をしたのは理由がある。明治十二年当時彼は「古今民権開宗」（同年三月四日大坂日報）において同じ大塩平八郎を評し、「人の米銭を応対なしに強奪して窮民に賦はすは以て民権と称すべきか。……我輩純乎たる民権家の眼を以て見れば其不当濫用を驚き且笑はざるを得ず」とのべているのである。彼の民権論が極めて国権的なものであることは柳田氏や林氏も指摘される通りだが、右の論以後、信介が「文珠九助伝⑬」「東洋民権百家伝」編さんの過程で相当変っていったことをここに示したものといえる。さてお信は父の死後勤王の志士に奉公するうち幕府の追手に姉が殺される。お信は逃げ桜山二郎と知り合う。これも奇兵隊に入り戦死する。お信は尼となり浅間に籠る。そこで女盗賊お力と知りあう。お力は「代官或は諸藩の役人にして民を苦しめ己に私したる不義の金銀、或は富に誇り高利を以て貧民を苦しめたる者の貨財の如きものは天に代りて刑罰を行ふの心にて……幼児にして奸物の為めに横領せられぬる者などは之を助け、弱きを助けて強きを挫き、貧を憐み富みたるを抑へて、専ら義侠の心を旨とせり。」（三十一回）という人物なのである。しかもこれが「お力はお信の教訓を受けしのち」のことである。まさに宗五郎的義民の姿そのものである。さらにお信の態度は、「この深山に籠りては天下の時勢に通ぜず。事を謀るに便宜悪し、因って妾は引分れてこれより在土（江戸の寓）に出で、世の動静をさぐりて汝に報知、且つ在土の地は諸人輻湊の地なれば、多くの人に交る内には天晴女大夫に会し同盟の人を得ることあるべし」（三十一回）といって山を下る。下る途中お金、智次（女）らの同志を得て、最後に小民を自由の身にするという筋である。

柳田氏の指摘をまつまでもなく、お信の言動は女性独自の立場でなく、いわゆる彼一流の民権家一般の姿である。女性そのものの権利伸張の問題は何一つ示されてはいない。むしろ暗示されているものとしては、「同盟の人を得ることあるべし」という偶然的な期待感であり、自ら獲得することなく、受動的に自由を待ち受けている

小民（国民）の姿でしかない。

要するにこの作品は信介の作品群の中では「東洋民権百家伝」の主テーマである義民＝民権という図式の延長上にあったものといわざるを得ない。

ここで簡単に彼の政治意識および作品群についてふれておきたい。

彼の生涯は大きく分けて、明治十六年以前の新聞人としての立場以後死亡するまで、三年間の政治小説家としての立場がある。新聞人としての政治理念は「平仮名国会論⑭」に代表されている。これは要するに一般大衆を含む早期国会開設要求にすぎない。その中で「国会は共和政治に非る解」「国会論者は勤王無二の精忠者たる解」なる論を展開しており、むしろ国権意識の強い考え方である。

もう一つの面は国権的な東洋経略問題である⑮。詳しくは柳田・越智氏の考証に詳しいので論述しないが、これを彼の政治小説の面でみておきたい。

「勤王為経民権為緯新編大和綿」（十六年八月十一日――十一月十一日、立憲政党新聞）および「興亜綺談夢恋々」（十七年四月六日――六月十八日、自由新聞）は彼の東洋経略問題を念頭において作ったものと思われる。「大和綿」は武藤・平野なる勤王志士を中心に民権国会に至るまでの活躍を記さんとしたものであったが、平野が朝鮮経略を志すところで中断している。「夢恋々」では中国が舞台である。日本人である雷春が活躍し、亜細亜の伸張をはかるという筋である。その序に「国権伸張即ち亜細亜振作の事歴に及び竟に自由民権平等主義を以て局を結べるものなり。」とあり、製作意図はこれにつきている。

右の両作品をみるとその内容があまりにも「経国美談」（天野龍溪）に似ているように思う。「経国美談」の前編は明治十六年三月に出ている。後編は十七年二月である。その前編では、テーベで中道派が専制、急進の両派を押えて民権の伸長を図るもので、後編では他の民主的国家と結び国権を伸張させるというものである。「大和綿」では案外和尚なる人物が登場し、中道的な発言をする。「人は運命なり、運命は希望に反く、世事は必ず意想外なり、意想外を案外といふ」という言葉は暗に急進自由党員に対する忠言となっている⑯。これらからみれば、信介の二作品はまるで「経国美談」の東洋版と同じとみてよい。

信介に内在する国権的な民権主義――それは一面において改進党的国権伸張主義と軌を一にするものをもっていたとみてよいだろう。信介の内部にはこのように対外硬的な国権意識と、「婦人農民労役大衆」を目途とする対国内民権意識が並行した形で存在している。

作品でいえば前者は「大和錦」「夢恋々」であり、後者は「東洋民権百家伝」の形象化とでもいえる」法灯将滅高野暁（ひはたかしたかののあかつき）⑰」であり、「自由艶舌女文章」や「義人伝 淋漓墨坂（なみだのすみさか）⑱」となっているのである。

これらの二つの系例を生みだした理由は何であろうか。対外硬的国権伸張は改進党の政策につながるものであり、「婦人農民下層階級」との連帯をはかる自由党の立場とはっきり矛盾するものであった。換言すれば、信介自身の内包した二つの矛盾した形は、とりも

なおさず自由党そのものの内包している矛盾をあらわしているのでなかろうか。

またこのことは明治十六年以降突如として上京し、それまでの実際的政治活動を中止し、政治小説の世界のみに入っていった理由にもなる。林氏の解題にも詳しいように、明治十五年まで、信介は言論界に政党界に極めて活発な自由民権運動を行なっている。丹後自由党の拠点になった天橋義塾の創設（明治八年）に始まり、反政府運動に（明治十年）、大阪の民権運動の中心言論機関であった「大坂日報」「朝日新聞」に、さらに立憲政党や、自由党員としての活発な遊説活動をした自由民権家小室信介の姿は十六年以降は全く見られなくなっている。おそらく前述したように度重なる発停処分やその属した立憲政党の弱体化、および福島事件をはじめとする一連の弾圧による自由党の分裂化は彼の民権運動の方向そのものに大きな変化を与えたことを物語るものである。さらに今一つ大きな要素として彼の養父小室信夫との関係も無視できないので簡単にふれておく[19]。小室信夫はその当時井上馨系の商人として海上王国三菱に対立する共同運輸の経営につくしていた人物で、勤王・民権のシンパとして出発し、新興ブルジョワジーの代表的人物だった。その女婿としての信介に初期の自由民権意識と異なった影響を与えたのは当然である。彼を囲む状勢は彼を行き詰まらせていったのもまた当然といわねばならない。その結果として、具体的な民権運動の実践化の行き詰まりを彼なりの方法で打開しようとした試みが政治小説進出の大きな動機であったのである。理念としての民権運動の実践が困難になったとき、国民大衆全体から遊離しようとする民権運動を再び取りもどすため、彼は小説の世界に具体的に描くことによって新しい方向を求めようとしたのでないか。一つの錯誤的方法としての時代がこの期に当たるのである。そしてその試みは対外的国権伸張という命題と、国内の自由民権意識の命題と――換言すれば政治意図と現実描写の問題――その両者が矛盾したまま、二つは統一されることなく彼の作品群に示されたまま終ったといえるのである。

「自由艶舌女文章」は以上のような矛盾の一つを示したものであった。時代を現代にとり、モデル的なものを（美人の舌禍）現実の素材としてとりながら、その解決は空しく非現実的である。観念的に民権意識の回復をはかろうとした試みは、単なるその意図のみにとどまり、続けようとすれば「長きにわたるは御退届」という告白通り、完結できない現実遊離の結末にいたってしまうのである。この空虚さはおそらく信介自身が一番よく知っていたはずである。

十七年十二月、政治小説の筆を断った信介は、井上馨大使に随行して、外務准奏任御用掛として渡鮮してしまう。この問題について林氏は「してみればすでに解党した自由党と、発行禁止になった自由灯を見出した信介が、この路をえらんだことは、少くとも自由党に対する変節とはいいえない。」とのべている。しかし政治小説に解決しなかった二つの矛盾――国権伸張対外硬政策と民権に従属する国権問題の矛盾――この両者をつなぐ方向を見出し得なかった故に彼は文学を捨てざるを得なかったともいえるのである。

私はこの論で、「自由艶舌女文章」を一応中心として、その与え

た影響および目的意識について考えたつもりである。そして同時にそれは「政治小説」が今日の文学史で定説となっている「粗雑な傾向文学㉙」とする考え方の根拠もまた示し得たと思う。しかし信介が解決できなかった二つの矛盾した方向は彼以後の政治小説でも解決しなかった問題であることに注目したく思う。一方では龍溪の「浮城物語」のように全く海外進出国権伸張的な政治小説に向ってしまうし、わずかに鉄腸の「雪中梅」などに政治意図と現実描写の接近がみられるが、それはやがて政治意図を見失う方向に向うことを示すものでもあった。

もう一度結論を要約しておこう。

信介にみられる対外的国権意識と、対内的民権意識は、文学の立場でみると政治意識と現実描写の問題に置きかえられるのではないか。そしてその両者が交差することなく別個にあったことは政治小説全般についての大きな特色を示すものでもあった。

言及できなかったが信介の作品で無視できないものに戯作調との関係がある。これについては越智氏の論考㉚にくわしいが、前述した「婦人農民労役大衆」と目途とするからには当然大衆性のある人情本・草双紙的戯作調と結びつく過程を重視せねばならないと思う。また戯作における勧善懲悪が政治小説で政治的意図に置き換えられてゆく過程も、政治小説を解明する大きな要素になる問題であろう。今後の課題として考えたく思う。

注1　糸井仙之助寄贈になるもので主として近世以後丹後一円に関する古記録、文書約千五百点あり。信介関係では「自由燈」「東洋民権百家伝」「自由艶舌女文章」「冥府狆談」等約十点あり。

2　自由党系啓蒙新聞、星亨出資、信介、宮崎夢柳らを中心として明治十七年五月十一日創刊。「自由燈（じゆうのともしび）」とも言う。

3　たとえば信介の僚友宮崎夢柳は「鬼啾々」の出版届を出さなかったことで入獄している。（前記柳田氏著一六六ページ）「自由燈」も十七年末発停処分をうけている。

4　東洋民権百家伝の緒言に「やつがれ幼き時佐倉宗五郎の演劇を見たりけるに、その事跡のあわれにもいたましくて、ほとほと身の毛の弥だち……いと堪がたき思ひありけり。……されば官に抗し理を守りて民の為に身を擲ちたるもの唯かの佐倉宗五郎一人のみかは……」とある。

5　文京との関係については前記越智氏の論考にくわしい。仙果とは大阪朝日時代の交友である。

6　一応というのは、完末に「案外堂曰く、此編は未だ全く尽きず、腹稿あまりあれども余り長きは御退屈云々」とあるによる。

7　（　）内は前記柳田氏著による。この部分の構成をみても、二十三回で前編後編を分けることは意味がない。

8　柳田氏の前掲書にくわしい。自由燈にその代表作「鮮血（ちしお）の花」「鬼啾々」を書いている。

9　夢柳著「高嶺の荒鷲」序文

10　木村毅氏「明治文学全集月報二十一」による。

11　「自由燈」が当時の読売新聞に次いで発行部数があったこと（東京府統計）をみると信介の作品が好評であったことがわかる。信介のキャッチフレーズ作りのたくみさは、十五年四月六日岐阜において板垣退助遭難事件に同行し、「板垣死すとも自由は亡びず」（十五年四月十一日付朝日新聞）なる語を作ったのをみてもわかるし、さらに海上王国三菱汽船に対し「海坊主退治の相談」（十六年五月絵入自由新聞）という流行語を作ったのをみてもわかる。

12 「明治文学全集84」福田英子年表による。
13 十三年五月三十日朝野新聞
14 十三年十二月一日より十四年一月二十五日まで朝日新聞に連載、発停処分される。
15 前掲越智氏の論文二五ページ、および柳田氏の著にもくわしい。十五年七月京城の変に渡鮮し、立憲政党新聞に報告した「朝鮮詳報」（十五年九月）、「朝鮮紀行」（同八月）および十七年仏清事変に中国に渡り「第一清遊記」（十八年一月）を書いたが、そこに朝鮮中国への対外硬経略を主張している。
16 前記柳田氏著四四一ページ。
17 十六年四月二十日――五月二十四日、立憲政党新聞。戯曲体で、「東洋民権百家伝」巻頭の民権家戸谷新右衛門を描いたもの。
18 十七年七月三十日――九月九日、「自由燈」掲載。院本風戯曲、義人民助（「百家伝」四帙に掲載予定だったが出ていない）らを描いたもの。
19 小室信夫については服部之総著「明治の思想」（理論社）に詳しい。
20 林基氏の解題三九〇ページ。
21 小田切秀雄「日本近代文学」十八ページ。政治小説を「粗雑な傾向文学」とみる立場に対し、飛鳥井雅道氏は「政治小説と近代文学」（思想の科学昭和三十四年六月号）において、政治小説を集団の文学とし、近代文学の出発点として位置づけている。
22 前掲越智治雄氏著三〇ページに「政治小説と草双紙――小室案外堂の場合、それは前者が後者に屈伏するという形をとった。この問題は二つに発展する。一つは龍溪の如く、政治小説と大衆小説を一つに考える試み。今一つは木下尚江の如く、草双紙的な政治小説から出発して、これを真正の近代小説の域に迄高める努力。……」とある。

（29ページからつづく）
4、赤松氏の親鸞に関する論文は服部氏の『親鸞ノート』以前にもある。ここで示した順番は、あくまでも、親鸞の問題の文に関する第一論文発表の順である。以下も同じ。
5、この問題については、注2に示した拙論の中で、私見を述べた。
6、この事と、諸氏の論が親鸞の解釈として誤っているか否かという事とは、厳密には、別の事柄である。また、諸氏の論が戦後の親鸞研究を前進させるために果たした積極的な役割については、十分に触れる事ができなかった。これらの事は、親鸞の問題の文に直接とり組む別の機会に譲りたいと思う。

※　※　※

（46ページからつづく）
3 のちにもふれる『芸術大衆化論争』によって、それは最終的にないしとげられた。
4 反映論とリアリズムについては、佐々木基一『リアリズムの探求』参照。
5 『異端と正系』所収。なお、氏の論点にはいくつか疑問があるがここではふれられなかった。
6 他に野間宏『文学論』など参照。
7 フィッシャー『時代精神と文学』。
8 中野『いわゆる芸術大衆化論のあやまりについて』など参照。
9 ここでは『一九二八年三月十五日』参照。